

京鹿子

京都府立総合資料館
京鹿子 | 京鹿子 | 京鹿子 | 京鹿子 | 京鹿子



4月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その七十九



最終のメトロにふたり余寒なほ
通夜の駅のこる寒さを抱いてをり
立山の巔に白置き猫柳
物种を蒔くはこの世の不信感
蜜へ蜜へ背面跳びの熊ん蜂
春の蠅そで摺り合うて及び腰

吟行・長岡宮跡他

春陰や鶏冠い井でに残る都跡
三川を結んで男山霞む
乙訓の華の助走や牡丹の芽

『円虹』五句「北の春」

北へ行く最終列車春の星
妻の背と桜前線追ひかける
枕木に春の鼓動や五能線
北の春つかむ右手に手の温み
窓際の席にひとひら春惜しむ

—
近詠
—

和田
照海

涅槃図



通盛の隠れ射場なる弓始
屠蘇客に脚引つ張らす牛の産
売れ残り足蹴にされて海鼠桶
啓蟄や鳴くほかはなし島の山羊
涅槃図に隙間麻醉の効きはじむ

—
近詠
—

松本
鷹根

余寒



地下を出て余寒の街に道を聞く
寒林の隙間だらけに神信ず
水仙に風土匂はす笑顔あり
如月の雨の思索は根に滲みる
舞ふ鶯に鳴き声のあり風二月

塩貝 朱千



自問

真白なる新年初心に還らなむ
虎の目は虎の眸離さぬ城襖
胡蝶蘭の純白に佇ち自問せり
しぐるるや鯖街道に鯖寿司屋
寒満月魔女の影置き皓皓と

英華採集

熱爛にのりそこねたる猪口ひとつ

京都 吉田 悌子

今の野風呂記念館の前は、祖父野風呂の生家であり神麓居と呼ばれていた。神麓居には、毎日のように来客が後を絶たず、野風呂は訪れる人への接客をする無類の持て成し上手でお盆に色々な盃をのせては銘酒を振る舞うのが好きであった。掲句は、数人の人達が数個の多彩な盃を自分の好みで選り熱爛を飲み交わし熱爛が進むにつれ皆が饒舌になり場が盛り上がっている。それとは逆にお盆に残された猪口は寂しく置かれたまま。残った一つはお客の中の下戸の人のもの、と想像するのも楽しい。

天秤のひとつは希望除夜の鐘

堺 辻 量子

「天秤」という言葉には、選別をするという特性から「裁き」の意味が込められていた。古代エジプトの「死者の書」では死者の魂の善悪を判定する場面に描かれ、ギリシャ神話では女神アストライアーは手にてんびんを持ち人間の良心を信じていた、とされ夜空に輝くてんびん座となり我々を見守っている。掲句は、天秤の片方に置いた「希望」に人類共通の願いが隠されていて、女神アストライアーへ捧げている。除夜の鐘が優しく未来の明日へ繋げている。

ばばが抱き次にじじ抱く七五三

福山 小土井 清和

七五三とは、七歳、五歳、三歳の子供の成長を祝う年中行事であるが以前は、それぞれの年齢により別々に行われていた。両親にとつて子供の成長を身近に感じる行事であり記憶に残るものの中に数えられるであろう。現代の家族構成を見ると日本人の平均寿命が高くなり三世代或いは四世代も多い筈で掲句は、正に実感として捉えられるのではないか。コロナ禍で様々な制約を受けるなか、実に微笑ましい構図を提供してくれている。

夕 桜 沼田巴字

夕桜帰り心を引き止めて
透けてゐる先は浄土や夕桜
花トンネル人は小魚となつて群れ
かき抱く空がありけり夕桜
天上より降る楽の音や海道忌

春浅し 植村蘇星

千枚田一枚となる深雪かな
琴の音のやはき旋律木の芽風
刻告ぐる泣く児は育つ春隣
人の世も九十九折なる青き踏む
追伸の一言重し春浅し

冬芽寒む 北川孝子

半身を蔵書に埋めて冬ごろも
茹で卵こつんと立ちし猫の恋
冬今宵窓辺に涙もろくゐて
空仰ぎ香りて蒲団干し日和
平明な言葉にちから冬芽寒む

ピアス 直江裕子

冬蝶の頭からほろほろ風になる
隣室が寒いひたすら布を刺す
数へ日のピアスひとつが砦なの
重い大根持つて落ちつくさみしさよ
石路の花どこを切つても光りだす

鯪 高木晶子

封をするこの一大事年の暮
鯪に雪ふり積もる天の技
この席は譲れぬ窓のぼたん雪
冬鳥の足沈ませぬ川硬し
来る年を思ひつ塩の壺満たす

七草粥 伊藤希眸

都心に雪もの音だけが街通る
新春の屋並を廻る警防車
宛名書くそれが書初めマスクとる
どこかほつとなにか切ない七草粥
追憶を手繰れば消ゆる六花かな

遊び足りない 奥田筆子

初鴉袖振り合ひて躲しけり
いつまでも遊び足りない風花よ
マイハウス前輪はみ出しがうなかな
雪中の音量上げて紅椿
寒明や自動ドアの性善説

さくらトンネル 井上菜摘子

在りし日の手紙の文字の花冷えす
さくら咲き散る真実はさりげなく
さくらトンネルどうでもよいを置いてきし
花吹雪くぐりて一人消えてをり
どちらにも桜咲きをり岐れ道

神麓集

君は蝶 村田あを衣

一の波二の波沖へ花筏
カクテルはみづいろ沖はおぼろなる
自由といふ不自由風船放ちやる
海光をまぶしがらずや君は蝶
蝶海へ我が未来図を大きくす

平家ものがたり 山中志津子

霜の夜の横笛平家ものがたり
一休寺の砂紋問答夕しぐれ
粕汁を吹きて饒舌聞き流す
我一語医師も一語や年暮るる
冬木の芽続ける事が生きること

春の鴨 井尻妙子

正論に背を向けてゐる春の鴨
コロナウイルスそろりそろりと猫の恋
猫柳賀茂の河原の曇りぐせ
砂山のくづれ余寒の風の中
占ひに差し出す両手万愚節

待春の 鷺山珀眉

飛驒路へとマグマを抱く雪をんな
氷柱つらら星の幾何学学ぶべし
春琴抄閉づ読初めの瞳閉づ
一生は創作ダンス去年今年
待春の一步は未知の^{あした}未来へと

初昔 亀井福恵

風さへも素知らぬふりに初昔
牡丹雪睫毛のあたり擦れちがふ
霜のこゑ毛細血管収縮す
虎落笛孔子のことば読み捨てに
体内のどこかが軋む花八手

奴 西村白杼

大江山ひかりの跳ねる手毬唄
疲れ気球天へ運べよ奴
初御空裏が表に返り来て
七日粥幸せ過ぎて溢れさう
茹で玉子つると剥ける四日かな

浄め塩 菊池和子

社家通り福良雀の紡ぎ歌
風雪や舞ひ立つ蝶の予約席
絞りたてのジュース飲みほす寒の朝
走り去る師走落葉のチャールストン
初雪や丸き地球の浄め塩

梅二輪 安田優歌

独り居の一人のための梅二輪
寒灯や天金褪せし考の聖書
夢に現れ妣シャキシャキと小豆粥
寒の月兔いづこと指眼鏡
梅ヶ香や裏側に置く御所ぐるま

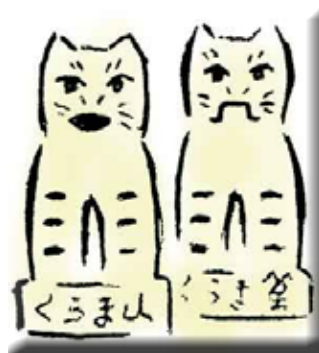
百円の古書

本郷 公子

银杏散る夜は手品師の右往左往
夕さりの風のささやき山茶花散る
鯛焼を手に百円の古書えらび
冬木立夜は影絵の幕上がる
蒸鮓や装ふ街の漫ろなる

笹 鳴 石原孝人

笹鳴やおのづから道生まれけり
凍て滝や風の瑕あと水のこ糸
闇に聴く音なき音や霜柱
想ひ出を芯に巻きたる毛糸玉
誰よりも高枝に結ぶ初みくじ



今日の俳句選集

56

花洛丸山 Maruyama 丸山 海道 Kaido 海道

Maruyama

Kaido

万象の生命と
共に遊ぶ洒脱な
今日の句集
第五十回配本 / 第五十六巻

丸山
海道

花洛がなかりんは落ちて右の傷

私には、生れ育った京都に對する
愛惜の念が極めて強く、名所
旧跡に属するものは殆ど巡った
と言ってよい。その軌跡の一部
を上梓する。

ISBN4-04-871556-9 C0092

定価：本体1100円＋税

丸山海道 第十一句集 [花洛]



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

揺り椅子に文の封切る冬ぬくし
初夢の頬に触れしか獺の息
成人式風に袂を遊ばせて
初釣りの大魚が写メで跳ねてをり
六感の研ぎ澄まさるる寒の星

岡山 佐藤 千恵

熱爛にのりそこねたる猪口ひとつ
笹鳴きの日々を新たに八十路坂

京都 吉田 悌子



羽音の重なり合うて初雀
初吟詠起句一節を高らかに
天秤のひとつは希望除夜の鐘
宇宙から望む地球や初御空
あらたまの地軸や二の足を踏まず
ゆく河の流れのごとし去年今年
ばばが抱き次にじ抱く七五三
中卒の父学捨てし開戦日
冬枯れの巨象を見たり大櫛
プラタナス散るモアイ像立ち並ぶ

福山 小土井清和

堺 辻 量子

ささがきの一人包丁始めかな

アヲチ 伊吹 之博

初釜や和服の似合う所作美しき

雪しんしんよすがらの庭明るくす

市川 小島 正士

花板のレシビ本繰る冬の夕

冬至の朝天上にまだ輝る月

年賀状添書一句に終末論

年の暮ガラス戸磨く父の息

酒田 藤波 松山

除夜の鐘枕に聞かせ熟睡す

来し方の断捨離はまだ漱石忌

葉喰ひ野菜も摂れと計測器

出迎へは皇帝ダリア無人駅

陽の匂ひ共に取り込む枯蠅螂

風強く窓の軋みし冬至かな

戸田 遠山 悟史

軒先の切り干し大根母の味

冬麗オーガニック野菜のふんいき

雪達磨つくりし孫も今は保母

習志野 上野 紫泉

改札出で冬満月とぶつかりぬ

加齢てふ病もありて年新た

梅原ひろし

歳晩や哮るストリートミュージシャン

初富士の裾野拡げて空の色

船橋 元橋 孝之

女子会のランチいびつな冬暮

笑ひ声幼子揃ふお正月

千葉 布川 孝子

山峡の鳥啼く旅の冬座敷

東京に二泊三日の寒波来る

「石焼きいも」エレベーターの間の悪く

枯木立歴史に載らぬ民数多

朝まだき騒ぐ大海冬の地震

冬晴れやベンチにバットを抱く少年

冬雲雀独り佇み見蕩れけり